

# 佐野君を偲んで



平成12年の正月合宿 1月4日西穂高岳  
山頂でガッツポーズをとる佐野君

## 北アの悲しみから1年

中央大学山岳部平成12年5月

合宿パーティー・リーダー

法学部法律学科4年 山本 圭介

平成十二年五月二日、私たち中央大学山岳部は遭難事故により、仲間の部員一名を失いました。亡くなったのは総合政  
策学部二年生の佐野裕哉君（19歳〓当時）です。遭難事故に際しましては、長野県警、中央大学関係者をはじめとする皆  
様には多大なるご心配をおかけし、ご協力いただきましたことを深く感謝申し上げます。

私たち山岳部は、積雪期の登山を目標として活動してきました。そして、その年度目標である一月、三月の合宿に向け  
て、十分な体力や技術、知識が身につくよう年間計画を組んでおりました。残雪期の五月ごろには、主要メンバーで偵察  
山行を行い、同ルートにおける雪の付き方や、危険箇所等の確認をしておくのが通例になっています。年度始めにこの合宿  
を行うことにより、隊全体として強化すべき点がより明確になり、部員  
一人一人がその役割に応じた課題を持って年間計画に取り組みことが出  
来るわけです。

そこで北アルプス槍・穂高連峰南岳横尾根から槍ヶ岳に登り、中崎  
尾根を下降するという目標で昨年五月初旬の偵察山行を計画し、四月二  
十九日に上高地に入りました。しかし、五月二日十三時十五分、横尾  
尾根二六六〇付近を縦走中に、私たちの足元の雪庇が崩落し、私たち  
とほとんど同じ場所にいたにも関わらず、佐野君だけが巻き込まれてし  
まったのです。事故の詳細に関しては報告書にある通りですが、こ  
の事故は山岳部の合宿山行中に隊全体の行動の中で起こったことであり、  
佐野君の何らかのミスが原因になったものではないことを、この場をお  
借りしてお断りしておきたいと思えます。

雪庇とは稜線の風下側に形成される雪のひさしのことをいい、雪山に  
おいては雪崩などに次いで非常に危険なものです。その回避には豊富な  
経験が必要であり、経験・実力ある者であっても、常に自分たちが稜線  
上にいることを確認するよう努めなければなりません。今回の事故直前  
の雪庇判断は、地形的な要因もあって確かに難しいものではありまし

同年三月には、文部省登山研修所主催の山行中に、大日岳において大規模な雪庇崩落事故が起こっており、登山界において雪庇に対する認識が強まっていただけに悔やまれてなりません。

佐野君は平成十一年十一月に山岳部への入部を希望してきました。なにか打ち込めるものが欲しい、というのがその理由でした。その時の彼からは、物静かで真面目な印象を受けましたが、笑う顔はとても優しく、気取らない人懐っこさがそのままに表れていました。入部について、そして山行について、話を進めていくなかで伝わってくる彼の積極的な姿勢からは、自分が何をし、それをどこでするのかをよく考え、人が何を言おうとも動じないほどに意志を固めているのが分かりました。

彼は最初の山行として富士山合宿に参加しました。冬山同様の厳しい環境の中で雪上訓練や耐寒訓練を行う、この合宿は、春に入部した一年生にとっても厳しいものです。それでも、彼は隊全体のことを考える冷静さと、仲間が辛いときには目立たぬようにそっと手を伸ばし、声を掛ける優しさを失うことはありませんでした。彼は多くを話す人ではありませんでしたが、体を動かしている時の彼はとても生き生きとして、初めての登山の新鮮な喜びを全身で表現しているかのようでした。

この合宿中、私は彼を含む一年生二人と耐寒訓練をしました。大分疲れてはいたようですが、いつまでも楽しそうに話をしていたことが思い出されます。同じパーティーでも、人それぞれに山に向かう理由や目的は必ずしも同じではありません。しかし、彼のように熱意を持って取り組む姿を見ると、共に山登りをするだけで、少しでも力になれることが嬉しくもありました。それは自分自身が山に登ることとはまた違う、上級生として得られる最も大きな喜びであったのかも知れません。

富士山での合宿を終え、一月の西穂高岳、二月の八ヶ岳と、彼はその後の合宿にも参加しましたが、自分がなすべきことには最後まで責任を持ち、主体的に関わっていく姿勢が変わることはありませんでした。秋に入部した彼には他の一年生との経験の差を埋めるために、多くのものを要求したこともあったかも知れませんが、それでも山においては、より経験ある上級生の考えは尊重し、きちんとそれに応えてくれました。下級生、特に一年生は「上級生に連れて行ってもらう」という意識が強いものですが、彼には「自分で登る」という意志があり、一人の登山者としての強い自覚と一途な気持ちを持った、本当に立派な後輩でした。

事故から一年が経ちました。これから先も自分の後輩を山で亡くしたことを、彼がいた山のことを思わない日はないでしょう。しかし一方で、山は彼や仲間たちから多くの長く残っていくものを与えられた場でもあります。もし、皆さんが大切に思う仲間と山登りをされることがありましたら、きつと、その中でしか得られないものを見つけられることと思います。その時には、同じように真剣に登山に取り組む、山で亡くなった彼のことを思ってください。

最後に、佐野裕哉君のご冥福を一同、深くお祈り申し上げます。

---

優しい笑顔の中に  
秘めた固い意志